

日野川の 鮎

鮎はアユ科の硬骨魚で、東アジアに広く分布し、特に日本の名産になっています。国内では北海道の一部を除き全国どこでも見ることができる魚です。

和名は「アユ」で、地方名は「アイ」などがありますが、呼び名そのものの数は多くありません。しかし漢字の当て字は多く、「香魚」「年魚」「安由」「王魚」「細鱗魚」「銀口魚」など多数あることから、いかに人々の生活に密着し、親しまれている魚かうかがい知ることができます。

日野川には漁の解禁日以降、多くの人達が鮎釣りを楽しみに訪れています。人工的に種苗生産した稚魚の放流を行っている、日野川水系漁業協同組合の井藤組合長と職員の方に日野川の鮎についてお話を伺いました。

「鮎は川で卵からかえった後、稚魚期を海で過ごします。そして、海と川の水温が同じになる春先に故郷の川を遡上するのです。日野川では、例年5月上旬に天然鮎の遡上が始まります。昨年は遡上が遅かったうえ、日野川の水量が少ないことから餌不足となり、全体に小ぶりでした。今年は水量もほどよく、上流に行くほど大きくなっています。日南町では体長25cmほどのものも捕れています。

ただ、近年全国的に産卵期が遅くなっており、遡上する鮎も時期が遅くなっています。以前は一番初めに遡上してくる鮎は大きく、縄張りも優先的にもっていたものですが、産卵時期が集中することにより密度が高くなり、鮎が小型化して漁獲対象サイズまで大きくなれないものが増える傾向にありました。

このため漁協では、今まで1匹5gで放流していた種苗生産の稚魚を、今年は1匹10gの大型放流に切り替えま



鮎

した。今年は4月に16回の放流をしました。その効果がでて、今年は大きいものが釣れています。今までと同じ1回200kgの放流でも、個体数が少ないので1匹が得ることのできる餌の量が多くなるのです。

また車尾堰(王子堰堤)で天然ものの鮎をすくい、今年は7回下流から上流にもってあがっています。6cmほどの大きさのものを、1回あたり50kg弱放流しています。」

「『最近鮎の元気が無い、釣りをしてもあたりも弱いし追いかけてこない』と言う話をよく聞きます。

鮎は飼育時に個体間の距離が近いと縄張り意識が低くなります。鮎の生息密度が高くなると縄張りを維持できなくなり群れで餌を取るようになるので、元気の良さは飼育履歴の影響が大きいと思われます。」

日野川で放流している稚魚は、低密度で飼育しているので縄張り意識があり、成長が良いものが多いとのこと。



鮎の放流

鮎 釣りのポイントとしては上流部の、大きな石のあるところ。釣りのポイントにシーズン最初に入った人は、縄張り意識の強い鮎を釣る事ができます。二番目三番目に入った人は縄張り意識の弱い、あまり追いかけてこない鮎を釣る事になります。

漁 協では今年、全体で150万匹約15tの放流をしています。その他1万匹の調査用の鮎を岸本町で放流し、成長の過程や取れた場所、放流の場所のデータがとれるようにしています。

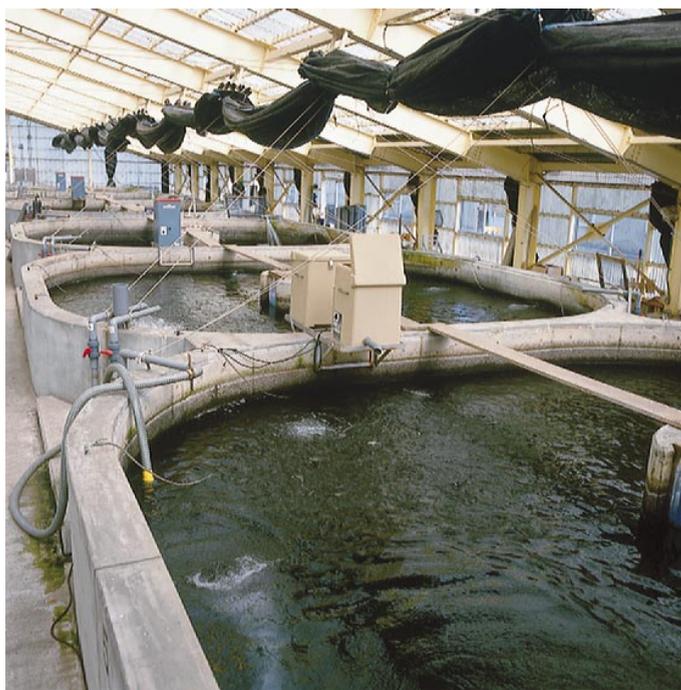


日野川で鮎釣りをする人

今後、鮎をとりまく状況も変化をしていくかもしれませんが、いつまでも日野川に鮎がいて欲しいものです。

鮎釣り大会が6月から8月にかけて各地で開催されます。7月は岸本町・日野町、8月は日南町の各地で行われるようです。一度挑戦されてみてはいかがでしょうか。

遡上する鮎



鮎種苗生産育成施設